

# もの・まちづくり

事務局長(沖縄県建築士会  
首里支部副支部長)

伊良波 朝義氏



沖縄観光の顔・首里城。城の北西には人工池・龍潭(りゅうたん)がある。首里地区のメインストリートともいべき「龍潭通り」を歴史と伝統、そして芸術が備わったまちづくりにしていくために、建築士として何ができるか。首里のまちとそこに暮らす人とを関係づけ、「主体はあくまで住民」(伊良波朝義NPO首里まちづくり研究会事務局長)として裏方に徹する。多種多様な職業の人々によるコラボレーションで、魅力的な龍潭通りを描く活動を紹介する。

伊良波氏は沖縄県建築士会首里支部の副支部長でもある。上間操(うえまのり)首里支部長によると、現在、沖縄県建築士会には15の支部があって会員は約千人。このうち首里支部には61人が所属する。

「城下町」としての首里を意識する機運は、世界遺産「首里城」復元が契機となった。太平洋戦争の沖縄戦で首里台地は壊滅したが、それでも時代を経てみると、風景のなかに城下の面影が残っているのが分かる。

### 多様なメンバーによるコラボ

1998年ごろから地域住民や商業者、建築士などによる「首里まちづくり懇談会」が活動を始めたが、当初、地域の課題を計画づくりや具体化につなげていくことがなかなかできなかった。

そんな中、2002年に那覇市が龍潭通り沿線を景観形成地域に指定したことなどもあって、懇談会側から首里支部に全面的な協力要請があった。さっそく支部ではまちづくり委員会を設置し、住民と建築士の協働による首里のまちづくりをスタートさせた。

龍潭通りは県が山川交差点から1200mにわたり、幅員16mに拡張改良する計画を進めている。また、那覇市も景観条例で後押しする。既に通りには赤瓦屋根などデザインを統一した建物がポツポツと現れている。

01年に実施したアンケート調査で、ミーガー(井戸)やスーシクワ(小路)、ウタキ(拝所)、世持橋(史跡)などの地域遺産に住民は誇りを持っていることが判明。これらを城下の風景として輝かせたいというのが、ここに住む人たちのまちづくり意識の根本にある。龍潭とこれら水の関連遺産は、琉球王国500年の歴史を刻んできた証明でもある。

### 世界遺産生かした龍潭通りに

このほかシンポジウムや講演会、公開勉強会、フィールドワーク、首里城の行事への参加、専門部会の開催などを通じて、足下灯や道路への連続した木陰の配置、遊覧説明板整備などのアイデアがもたらされ、一部遊覧説明板などは民間助成を受けて実現に動き出している。

NPO法人(石崎雅彦(しずまのり)理事長)は昨年6月に発足した。理事24人中、建築士会会員は3分の1にとどまる。「建築士は行政と住民間のコーディネーターで、気軽なまちづくりのサポート」(伊良波氏)に徹しているわけだ。まちづくりに連携は欠かせず、建築士などの専門家だけに偏った団体では限界があるとの判断からだ。活動は啓蒙や行政への提案活動など幅広い。

多種多様なメンバーだから勉強内容も多彩だ。ある日の勉強会では「相続対策」というユニークなテーマが掲げられ、講師にフィナンシャルプランナーを招いた。「問題解決のための専門家を探すことにかけては事欠かない」

(同氏)というほど多彩で頼もしい布陣で組織を支えている。

2月28日付本紙『沖縄のみち物語』

8面にあるとおり、実は龍潭と関わりが深い首里城の湧水・龍樋と寒水川は、15世紀までは王家(琉球)と城下住民の共同井戸であった。その後は王家専用となるが、かつてこうしたおおらかなつながりがあったことは、首里城と城下のまちづくりを考える上で欠かせない視点といえよう。



フィールドワークの様子